

会議録

| | |
|---|---|
| 会議の名称 | 平成20年度 西東京市青少年問題協議会 第4回 |
| 開催日時 | 平成21年1月26日（月曜日） 午前10時00分から午前12時まで |
| 開催場所 | インゲビル3階 第3・4会議室 |
| 出席者 | 委員；大塚委員、大松委員、角田委員、金原委員、 栗原委員、嶋田委員、住田委員、鈴木委員、 本間委員、真鍋委員、森（信）委員（五十音順） 欠席；木曾委員、中野委員、細田委員、堀尾委員 事務局；二谷子育て支援部長 子育て支援課萩原課長補佐兼調整係長、倉本調整係主査 調整係 矢部 児童青少年課；齋藤課長、鶴田児童青少年係長 |
| 議題 | 1 「西東京市の青少年像」の具体的な取り組みについて 2 その他 |
| 会議資料の名称 | ・会議次第 ・中学生ヒアリング報告と今後の子どもヒアリング実施について ・青少年問題協議会委員と青少年育成会との意見交換会（2008年12月7日実施） ・青少年像トップ10・問題点トップ10・解決策トップ10 ・「西東京市の青少年像（提言）」に関する委員の意見（まとめ） ・西東京市子どもの権利に関する意識アンケート報告書 ・西東京市子どもの権利に関する意識アンケート調査の概要 |
| 記録方法 | 発言者の発言内容ごとの要点記録 |
| 会議内容 | |
| <p>発言者名：</p> <p>発言内容</p> <p>萩原課長補佐</p> <p>定刻となったので、協議会を始めたいと思う。年が明けて初めての協議会であるので、子育て支援部長よりご挨拶させていただきたい。</p> <p>部長</p> <p>部長より年頭の挨拶</p> <p>萩原課長補佐</p> <p>続きまして、副会長よりご挨拶をいただきたい。</p> <p>座長</p> <p>副会長よりご挨拶</p> <p>事務局</p> <p>続いて欠席者の報告などをしたい。</p> | |

欠席者報告

資料説明および報告

座長

それでは議題に入る前に、お知らせとご協力いただきたいことがあるので、お話ししたい。

まず、人権擁護委員からの依頼であるが、「子ども達からの人権メッセージ発表会」を毎年順番でそれぞれの地域が担当して行っているが、本年度の第16回は西東京市が担当することとなった。9月12日（土曜日）保谷こもれびホール大ホールにて、開催の予定であるが、後援としてチラシや当日の配布物に西東京市青少年問題協議会の名前をいただきたいとの依頼であった。過去に開催した回でも、後援をいただいているようであるので、みなさんの承認をいただきたいとのことであったがいかがか。

委員一同

異議なし。

座長

それでは承認させていただく。当日は子ども達の発表もあるので、ぜひ足を運んでいただきたい。

つづいて東京都の「心の東京革命推進協議会」において、発足当時から子育て支援事業として「東京塾」をおこなっている。西東京市では例えば乳幼児期への事業については、グループワークを中心に、子育て期の悩みを聞いたり、親同士が話をする中での気づきがあり、好評をいただいている。開催回数は年間300件以上である。東京都の予算の再編で、「早期からの「しつけ」の後押し事業」ということで、平成21年度から新たにおこなうのであるが、まずモデル事業としたいとのことであった。西東京市は活動が評価され、東京都より打診があったので、取り組んでいきたいと考えている。今後この件については、協議会において報告をしていきたい。

最後に東京都第28期青少年問題協議会において、「メディア社会が広がる中での青少年健全育成について」という諮問が出された。その説明文の中に「東京都の青少年健全育成に関する条例」のあり方改正についても検討して結論を出してほしいとあった。我々も東京都との関係があるので、議論をしていきたいと考えている。

それでは議題に移りたい。「西東京市の青少年像の具体的な取り組みについて」であるが、専門部会において協議されてきた内容をご報告いただきたい。

A委員

前回定例会でもお話ししたが、青少年育成会との意見交換会を12月7日におこなった。後ほど座長からご報告をお願いしたい。また、11月28日に専門部会と子どもの権利に関する条例策定委員会のヒアリング部会において、市内在学中学生との意見交換会をおこなった。活発な意見がでたので、当日参加された委員からもご報告をお願いしたい。

お手元の「西東京市子どもの権利に関する意識アンケート調査報告書（以下「アンケート調査」という）」であるが、22ページに「大人になっても西東京市に住みたいか」という設問があるが、西東京市の青少年像にも深く関わると思うので、参考にさせていただきたい。詳しい分析は「子どもの権利に関する条例策定委員会」において、おこなっている。

また、中学生のヒアリング報告及びアンケート調査30ページにもあるが、「社会に役立つことをしたい」という設問について、平成14年度の調査より「思う」「そう思う」

の数字が高くなっている。これは文部科学省が奉仕を教育課程に取り入れたことにもよると思うが、最近の傾向として「ボランティア活動をしたい」「社会の役に立ちたい」と考える子どもが増えてきたことを感じさせる。他にも報告したいことがあるが、分析してからさせていただきたい。

では青少年育成会との意見交換会について、座長から報告をお願いしたい。

座長

お手元の資料のとおり、青少年育成会との意見交換会が開催された。その後の協議会については、裏面のとおりであるが、こちらが重要ではないかと思う。

まず参加団体が19団体中10団体であったことは、青少年育成会の全体像が見えてきた気がした。お話を聞いていくと、青少年育成会会長連絡会への参加についても、縛りがなく全団体の参加が無いようなので、まず連絡会を充実させることが重要であると感じた。そうすることで、青少年問題協議会との連携もよくなっていくのではないかと。

また今回のような意見交換会を定例的におこなうことについてであるが、必要であると思うし、お互いが連携を深めるために重要だと思う。また、青少年育成会も視点が広がるのではないかと思う。

急遽おこなったこともあって、投げかけるものが多すぎ、議論が散漫になったように思うが、みなさんの考えている問題点を出していただけたということで、よかったと思う。1期に1回でも開催する必要があると思っているが、いかがか。

B委員

「地域の具体的な取り組みを模索する」といった議題で、協議会では話されていたので、もっと以前からそういった会が必要であろうと感じていた。

C委員

青少年育成会は「現場の声」であると思う。会によって、いろいろな問題点があり、統一されていないように感じてしまうが、その問題点を青少年問題協議会で汲み上げていければよいと思う。

D委員

全部の団体ではなかったが、旧両市の取り組みの違いがわかったので、開催してよかったと思うし、我々も現状を理解するために定期的におこなったほうがよいと思った。

座長

それでは青少年育成会との意見交換会は続けていくということで、次期にも引き継いでいきたい。

A委員

続いて、中学生との意見交換会について、E委員からのご報告いただきたい。

E委員

子ども達からの意見については資料のとおりであるので、当日の雰囲気などをお話したい。生徒会に関わっている子どもがほとんどであったので、非常に落ち着いている印象を受けた。最初は緊張のせいも、積極的に意見は言わなかったが、こちらが雑談を交えながら話していくと、堰を切ったように日ごろの思いが出てきた。また、子ども達の中には、生まれてからずっと西東京市に住んでいる人だけでなく、他市から引越してきた子もいたため、西東京市に対する認識は培われていないように感じた。今回は他校の生徒との話す機会であったが、子ども達も始めてであり新鮮に感じたようであった。交流を喜んでいたので今後も続けられたらよいと思った。

子どもが普段接しているのは、自分の親や先生、近所の大人なので、改まったところ

で、いつもと違う大人と話すことで興味を持ってもらえたとし、意義もあった。

いろいろと書いてくれた子どもが「これは市長も見てくれるのか」と言っていたので、「きちんと届けます」と伝えた。

F 委員

最初は今回だけで終わってしまうような雰囲気もあったが、最後には「次はいつやるのか」という気持ちに変わったのが、すごく印象に残った。また、子ども達はとても真剣に考えているということに驚いた。大人のほうが真剣でないように感じてしまうくらいであった。

A 委員

「青少年の日が必要か」という質問では、「あったほうがよい」という意見が多かった。「子どもの日」があるのだから「青少年の日」があってもいいという意見もあったので、青少年問題協議会でも時期や内容などを検討し、青少年に関わる団体が協力して、市全体の取り組みとなるように考えていきたいと思った。

子ども達は自分の親や、先生以外と話す機会が少ない。そのため堰を切ったように話し始める子どももいた。「大人にこんなふうに自由に意見が言えるなら、たくさんやってほしい」「声をかけてくれれば、次回も必ず参加したい」という意見もあったので、青少年問題協議会でおこなうかどうかは判らないが、単発的でなく、子どもが集まって意見交換できるような場を設けていくべきだと思う。

アンケート調査23ページでも結果がでているとおり、大人に「子どもが自身のことが好きだと思っているか」と聞くと、約80パーセントが「そう思う」「まあそう思う」と回答しているのに対して、中学2年生は約40パーセントが「そう思う」「まあそう思う」と回答している。大人と子どもが感じていることには、差がある。その差はどうして生まれてくるのか。西東京市の青少年像を考える上でも、非常に重要なことであるので、こういったことも含めて検討していく必要があると思う。

座長

自身が参加している「社会を明るくする運動」においても、毎年7月に事業をおこなっているが、子ども達を巻き込んでおこなう案も出てきている。

A 委員

資料の説明をしたい。「青少年像トップ10・問題点トップ10・解決策トップ10」であるが、解決策トップ10はほとんど大人の側の問題である。この解決策トップ10について説明したい。

1番目については、何か地域でイベントをおこなう時に、大人が参加させたいと考えて、大人だけで考えるのではなく、青少年の意見を聞き、魅力のあるイベントにしないと参加しない。

2番目については、まさに大人の問題ばかりである。

3番目については、アンケート調査の結果を見ても、子どものいる親でも、子どもへの理解は不十分である。子どものいない大人はなおさらである。家庭や地域で子どもと、どのようにコミュニケーションを取るかなども、伝えていく必要があると思う。

4番目については、1番目と同じように社会体験などの場を与えていくのは、大人であるので、考えていく必要がある。

5番目については、子どもが問題を起こす場合、家庭に問題があることが多いので、やはり大人の問題になると思う。子どもは育つ環境で変わってしまう。

7番目については、先日の中学生との意見交換会のように、子どもの発言を認める

と、意見を出してくれる。大人が子どもの目線に立つ必要があると考えている。

9番目については、心の東京革命の「心の東京ルール~7つの呼びかけ~」の中でも言われているとおり、他人の子どもにきちんと叱れる大人が少なくなってしまった。小さい頃から知っている子でも、中学生や高校生くらいになると、「声をかけにくい」という意見をよく聞く。なぜそうになってしまうのか。成長の途中で関わりがなくなると、その後は子どもとの関係が保てないようだ。

10番目については、こういった子どもを育てるために、小・中学校で道徳の授業をしているので、教育委員会でもさらなる取り組みをお願いしたい。

座長

任期が10月までであるため、具体的な取り組みとして、7月までに意見をまとめなければならない。どの点をどういった形で盛り込むかなど、ご意見を伺いたい。

資料として、以前ご意見いただいた委員のみなさんからの具体的な取り組みをまとめたものが今回も配布されているが、この中から「青少年の日を制定する」など、提言の内容に盛り込むものを出してはどうか。

A委員

以前、4つの柱に分けて各委員からご意見をいただいたが、提言としては箇条書きの書式ではなく、全体をまとめた形で文章にしてはどうか。

内容を読み返してみて、この大不況で就職が難しいという話や、アルバイトも募集が無いという話を自身の回りでもよく耳にする。そういった中でG委員のご意見にあった「フリーターへの支援」も必要ではないかと考えた。

G委員

全体的にまとめることには賛成である。

座長

現在の中学生は、受験に関して多くの影響を受けているのではないかと感じている。その点について、全く盛り込まないというのは、いかがかと思う。

A委員

今年は小学生の受験が増えているようである。どうしてそういった傾向になるのか。

H委員

学力低下がかなり大きく影響していることと、学力志向の年代が今から30年くらい前にあり、その時の子ども達が親になっていることも影響しているのではないか。また現在の就職難のような状態になると、「安定した生活を望むため、よい学校へ行かせる必要がある」という親の考え方の影響を受けるのではと考えている。

フィンランドではゆとり教育で、子ども達も「勉強するのが楽しい」と感じている。なぜかというところ「自分自身のために勉強している」からである。日本は勉強するのが好きではないが、将来のために勉強しているなど感じている。

A委員

貧困家庭に塾の授業料や入試の代金を貸すといった制度もあるようだが、実際は裕福な家庭の子どもは塾に通えるが、貧困している家庭は塾にも行けず、入試も受けられないことがあるようだ。貸付の制度もあまり広報されていない。

フィンランドの子どものお話があったが、指導者の問題もあると思う。教科書を見ておこなうのではなく、問題意識を与えるような教育であるので、解く楽しみがあると思う。日本は詰め込み式のため、興味がわかないのではないか。

小学校では、勉強のわからない子どもは置いていかれてしまう。それは中学校に行っ

ても変わらない。その子どもが貧困家庭であれば、なおさらついていけなくなってしまう。このことについても提言に盛り込んではどうか。

座長

自身の子どもの受験期にも、子どももそうであるが、親も揺れ動いた時期であった。精神的なストレスはものすごいと思う。

F委員

小学校から中学受験をする子どもが増えている。景気は悪いのになぜ増えているのか。

以前は中学校を卒業すると、職人の修行を始める子どももいた。今の子ども達はどうかというと、コンビニエンスストアなどの技術が必要でないところで働いている。また、今の職人は大学卒業者がほとんどである。いま「派遣」が話題となっているが、「職人は全て派遣である」という話を聞いた。

H委員

中学生の意見の中に西東京市に好意的な意見があるが、「地元のどこがいい」のか聞いてみたい。そういうことを掘り下げて聞いてみてはどうか。

A委員

グループワークの中で「西東京市は不良が少ないから良い」といった意見があった。吉祥寺などへ出かけると、危険を感じることもあるようだ。

I委員

吉祥寺や渋谷などの繁華街を持った街には外部から遊びに来る人がいるから、より危険を感じるのだと思う。

J委員

自身のところに来る子どもは、自分を大事に思えないようである。アンケート調査でも、中学2年生くらいになると肯定感が持てないようであるので、どのようにすればよいか具体的に考えなくてはならない。職業などにしても「いろいろある」ということを、誰もが認められるようなところがなくてはいけないと思う。価値観の多様性といわれるが、現実はお金のことが多くを占めていると感じている。職業体験をすることで「いろいろあって、これがいい」と思えることを、教えていくことができないものか。お金をもらえることだけがよいことではないと、実感を持って知ることが大事だと思う。

最近「幸福度」が、その国の「成熟度」であるという話を読んだ。お金に執着しすぎていた部分を、戻す方法がないものかと考えている。

H委員

先ほどの話に同感である。「キャリア教育」の取り組みを教育の現場でしっかりおこなっていただきたい。それは職業観だけではなく、生きる力や一人ひとりの子どもの価値観を育てるのに意味があると思う。それには地域の応援や連携が必要である。

A委員

以前自身も都民カレッジに関わって、中学生の自己肯定感について調べたが、勉強のできない子どもは低い結果となった。価値観が勉強やお金に置かれているためである。大人がそういった価値観をもっていることで、子どももそういったことを感じているのであろう。

座長

自身が子どもの頃は、勉強以外でも、走るのが速かったり、絵が上手だったりと

た、いろいろな才能も持った人たちは尊敬されていた。また、ガキ大将のような子どもも、異性から好かれていたと思う。他の人にもないものを持った人たちは慕われていた。

C委員

遊びがあったこともそういった考えができた理由だと思う。

格差社会のことも、経済が急激に変わっていくなかで、発生してきたことだと思うので、経済が子どもにかなりの影響を及ぼしていると思う。

子どもの意見を聞いていくと、大人の反省点が必ず出てくる。より具体的に取り組んでいくことが大事である。

F委員

中学生との意見交換会の際に感じたことであるが、大人は全てを理解しているような目で見てしまうが、子どもからすると「産まれてきたこと」「生きていること」「勉強すること」など全てに矛盾を感じている。青少年像を考える上で、常に子どもの目線に戻る努力が必要である。

C委員

矛盾を「矛盾だ」と感じることも大事である。

F委員

子どもの感じている矛盾のほうが、正しいと思う。矛盾という感覚を持てなくなった大人のほうが、間違っているのではないか。

A委員

アンケート調査の結果であるが、23ページの「自分のことが好きだ」という質問に、「そう思う」「まあそう思う」とした小学校5年生は70パーセント近いのに対し、中学2年生は40パーセントくらいしかない。逆転している状況である。それは、思春期を迎えたことで、考え方も変わってきたということもあるだろうが、他にも要因があるのではないか。また、同じ質問でも16・17歳になると50パーセント近くに帰っているのは、価値観が一つではないことなど、いろいろなことを知り、希望が見えてくるからであろう。小学校から中学校へ進むと、好きという割合が減ってしまう要因を考えていかなければならない。「自分のことが好きだ」と思っている子どもは、青少年問題協議会が求めている青少年像をある程度持っていると思う。「自分のことが好きだ」と思えない子どもは、青少年像を持っていないので、掘り下げて考えていく必要があると思う。

B委員

先ほど「解決策トップ10」の話があったが、自身の体験であるが、少年野球を考えると、地域との触れ合いもおこなっているし、家庭とのコミュニケーションにも関係していると思う。具体的な取り組みについて話されているが、こういった場で議論されていることを、もっと解りやすく大人に伝えていくことが、大事であると思う。「具体的な取り組み」というタイトルであると、身構えてしまうが、地域の青少年育成会などがおこなっている活動がまさにそうである。そういった取り組みを評価し、他の地域でも取り入れていけるような、提言をしていきたいと思う。

総論は、A委員の意見のとおりまとめる形がよいと思う。

G委員

最近お母さんの感じが変わってきていると思う。自身の子どもの世代などは、感じなくなっていたが、現在は一人ひとりと話をする時と、全体に向けて話をしている時では、目の輝きが違うと感じる。あまり目立たずに、回りと同じようにしていようと考えているのであろうか。地域で子ども達に関わることも大事であるが、親への取り組みも

考えていかなければならないと思う。

A委員

親が違うという印象は、小学校へ行っても感じられる。親のマナーが悪いと、その子どものマナーの悪さは際立って見えてくる。そういった親をどう教育していくかが、いつも課題となるところである。

B委員

今話題に出た親は自分中心であり、家庭や子どもに関することにおいての家族の中での決定権などを、持っているように感じる。

A委員

ゆとりを与えられるような環境を、団塊の世代を中心とした地域の大人など、周りの人が整えてあげる必要があるのだと思う。

F委員

最近子ども達は、先生や親など「人を尊敬する」ことが、少なくなっている。それは家庭の中で、夫婦がお互いを尊敬することをしないからではないか。それを子どもに見せることが、重要なのではないか。

A委員

学校への不満を、家庭で言うような時代であるので、先生を尊敬できなくなるのではないか。いろいろなアンケートでも、「家庭の中でほっとできる人」はほぼ半数は母親であり、父親に関しては20パーセントにもならない時があるようだ。親が尊敬の対象になっていない。

F委員

尊敬していない人に怒られても、素直に聞けないと思う。

座長

まずは人を敬うことから始める必要がある。いつでもこの議論に戻ってしまうが、大人に問題があると思う。こういったことをいかに提言の内容に盛り込んでいくか。

C委員

子どもの問題というと無責任のようであるが、登下校の見守りも子どもの肩に手が触れただけで「セクハラだ」と言われてしまう。

座長

今期はあと2回しか定例会がない。定例会で話をしていくことと、それを受けて専門部会で反映させなければならない。提言を起草する専門部会を立ち上げたいと思うが、いかがか。

提案がなければ、調査をしていただいた専門部会委員はそのまま起草委員会になっていただくことでいかがか。

委員一同

異議なし。

座長

議題は以上である。

この後は情報交換とさせていただきます。

各委員の情報交換

以上にて終了。